

『神戸女学院の一二五年』を読んで

大 野 篤 一 郎

先日、史料室から『神戸女学院の一二五年』を頂戴した。半分ぐらい読んで、しばらく本棚に置いていたら、書評を書いてほしいという依頼が追っかけてきた。改めて読み通してから書き始めたが、結果は客観的な書評というよりは主観的な感想文になってしまったことを予めお詫びしておきたい。

特に印象に残った点をいくつか挙げることにしよう。

第一に感銘を受けたのは、やはり、一八七五年に神戸の「女学校」として創立されてから、一八九四年に「神戸女学院」という校名を校門に掲げるまでの間にタルカット、ダッドレー、クラークソン、ブラウン、ソールなどの婦人宣教師の先生方が払われた努力である。彼女達が開国まもない日本でしなければならなかったのは、第一にキリスト教の伝道だったのだが、それとやらんで日本の若い女性に対して高度の知的教育を与えたいという情熱がどれほど強かったかが、いわゆる「宣教師文書」に残された書簡から窺われる。特に第二代校長のクラークソン先生の書簡には「外仕事の男手を募って、小鳥、ひき蛙、蛇などと一戦を交えました」（二一ページ）と書かれていて、理科教育のためには動物を実験に使ったり、標本を作ったりすることを憚らなかったことが窺われる。

第二に強い印象を受けたのは、ブラウン院長の書簡の中に出てくる、不景気の時代に生活困窮者を助けるために寄宿舎の学生たちが自発的に朝食と夕食のお菓子代を我慢して献金したという話である。当時の学生たちの間に隣人愛の精神が浸透していた証拠だと思う。

第三に印象に残ったのは、デフォレスト先生が創立五十周年記念に同窓会誌『めぐみ』に書かれた「五十年汽車旅行的回顧」という記事で、これは、私の知っている限りでは、『神戸女学院百年史』にはまったく言及されていない。ここで、先生は簡潔にそしてユーモラスに五十年の歴史を汽車旅行にたとえながら描きだされているのだが、この中でデフォレスト先生は「人々はキリスト教が外国のものでも内地のものでもなく、主キリストの生ける霊が人間の生命の中に具体化される万国的の教えであると知ってきました」（五五ページ）と述べておられる。ここにはキリスト教の教えの普遍性を堅く信じておられた先生の信念がよく現れていると思う。

第四に感銘を受けたのは、第二次大戦が始まったため帰国されたデフォレスト先生の代わりに、最初の日本人院長となられた畠中先生が礼拝中止の要求をはねつけ、講壇から聖書をおろさず、礼拝を毎日続けられたことである。これはある意味では軍国主義日本では殆ど抵抗運動に近かったと言えるのではないかと思う。

戦争中の女学院生がどんな毎日を送っていたかを知る材料を提供しているのは、卒業生の池宮恒子さんの書かれたコラム「戦争の思い出」（六五ページ）である。私より八歳ほど年長の卒業生だが、そこには寮の食事の内容がどんな悪くなった様子や学内に避難用の防空壕を掘った話など私の小中学校時代の体験と重なり合うことが多く、これぞ「同世代の記録」という思いが強かった。

この『一二五年』には本文の中の写真以外に最初と真中と最後に全部で二四ページに及ぶ写真―その多くはカラー写真―が載せられている。サイズが少し小さいのは残念だが、よく見ると何人か今は亡き先輩の先生方の若き日のお

姿が窺われ、感慨ひとしおであった。これらの中の古いものは恐らく退色劣化が進んでいると思われるので、多少の費用はかかってもデジタル化されるように希望する。できれば、古い文書類もデジタル化されると、今後何十年経っても変質がなく、検索にも便利だと思われるので、史料室や図書館が中心となってデジタル化を考えていただきたいと思います。

女学院に長くおられる教職員や卒業生にとっては、この本の中に書かれた多くの事実はすでに知られていることかもしれないが、在学生・在校生の人たちがこの本を読むことによって、この学院が創立されてから今日までのような人たちの努力や情熱によって支えられてきたか、そのなかでどのような教育がなされてきたかを知ってもらいたいと切に希望する。

最後になったが、この本を編集された「編集委員会」と委員長の高島進子先生の御苦心に敬意を表し、また、本文を書かれた史料室の若山晴子さんの御努力とストーリー・テラーとしての並々ならぬ才能に敬意を表するとともに、それを背後から支えられた史料室はじめ多くのかたがたの御努力にも一読者として感謝したい。

（本学名誉教授・元史料室長）

— 二〇〇二年 春 —